

がん・緩和ケア領域におけるソーシャルワーカーのための  
スキルアップセミナー in 京都 開催報告

報告者：福地智巴  
(静岡県立静岡がんセンター)

「かけがえのない時間を大切に過ごすための意思決定支援」

■セミナーの開始にあたり、日本ホスピス財団の事務局長である大谷正身氏が、日本財団がどのような事業や活動を行っているかをご説明くださり、DVD をとおして事業・活動内容が紹介され、受講者に対して、積極的な活動への協力と賛助会員としての参加の呼びかけがされた。

引き続き、日本ホスピス財団の事業委員でありスキルアップセミナーの主任研究者である福地がこのスキルアップセミナー継続の経緯を簡単に説明した。

■ セミナーは、細川豊史先生（京都府立医科大学 疼痛・緩和医療学講座 教授）による基調講演から始まった。講演タイトルは、「かけがえのない時間を過ごすための早期からの緩和ケアとがん疼痛ケア — 知ってほしい痛みのお話 —」。

細川先生は、ご自身の患者としての体験や医師としての痛み治療体験のエピソードを通して痛みと向き合うことになった経緯を語って下さったが、そのエピソードは先生のお人柄に触れられる内容であった。また、本邦のがんおよびがん疼痛の現状とともに、なぜ「早期からの疼痛緩和」が必要であるかを、医学の視点から、また患者の情緒的側面から分かりやすく説明して下さり、痛みの種類・構造・出現のメカニズム・ストレスとの関係等の理解が深まることで、「不快な感覚的かつ情動的体験」である痛みが、患者の心と暮らしに与える影響の大きさを改めて痛感した。さらに、がん疼痛を抱えている患者のアンケート調査のお話では、痛みを経験している患者 176 人のうち、痛みの治療を受けていない患者が 113 名（全体の 64%）もいることが提示され、その要因のひとつとして、がん疼痛の治療の開始が、がん治療の中断につながるのではとの患者の恐れがあることの説明に、患者の心身の負担軽減を踏まえた緩和ケアへの橋渡しの必要性を再認識した受講生が多かった。講演終盤には、本邦の緩和ケアの動向や政策・施策にも触れていただき、MSW として緩和ケアの充実に貢献するには、ソーシャルワークの目的である「自立支援」「自己決定の尊重」「QOL の向上」を常に意識した相談支援と、MSW の役割である「Mediation（仲介）」「Advocacy（弁護）」「Coordinate（調整）」「Networking（供給体制作り）」のスキル向上が鍵になることも再確認できた。お忙しい時間の合間をぬって講演にかけつけて下さった細川先生に心から感謝申し上げます。

■基調講演後の昼食はお弁当を準備し、受講者全員がグループごとに、一緒に昼食の時間を過ごすよう工夫した。同じグループで、同じお弁当を食べる時間は、交流と情報交換

を促進した様子であった。今までのスキルセミナーでは、昼食は自由時間としていたが、今回は従来のような1泊2日のプログラムではなく、初日の懇親会が設定できなかったため、昼食を一緒に摂る形とした。これは、受講者間の緊張を解く意味でも効果的であった。

■昼食後は早速演習（Work）が開始された。

Work 1は、福地（静岡県立静岡がんセンター）が担当し、「意思決定支援」をテーマに連想ゲームを行った。グループ内で挙げられた内容を全体でシェアし、日頃の相談業務を振り返りながら、ソーシャルワークにおける意思決定場面および支援が多様であることを再確認した。それを受けて、「ソーシャルワークにおける意思決定支援とは」をタイトルにミニレクチャーを行った。続いて、Work2-①として、「代理意思決定」の仮想事例を提示し、具体的な支援の前提となる対象者理解を深めるためのグループワーク（模造紙使用）を行った。提示された内容では十分でない患者・家族に関する必要だと思われる項目をリストアップしてもらい、各グループより発表し、福地が質問に答えるやり取りで対象者理解を深めるワークを行った。

Work2-②は、田村里子氏（with 医療福祉実践研究所）が担当した。Work2-①により模造紙上で多角的に表現されるようになった事例に対して、次のステップとして、具体的な支援計画を立案することと、具体的なアプローチを検討するワークが行われた。患者の心身はもちろんのこと、患者・家族間および家族間の関係性、各家族成員の認識・感情・意向、状況・情報の共有の現実、合意形成に向けた阻害要因および強化要因の把握などを視野に入れ、各グループで支援の目標を明確にし、目標に向けた具体的な課題を検討した。

その後、全体で支援計画をシェアするため、各グループに、目標・課題・計画ともにファースト・アクションとして何をするかを発表してもらった。各発表の後に、講師陣より発表内容の目標・課題・計画・アクションの根拠を確認し、発表者に回答してもらいやり取りを行うことで、アクションに向けた条件や制限や留意点が明らかになっていった。

■最後に、グループワークでの体験を整理し、さらに深める事を意図して、田村氏が「かけがえのない時間を過ごすための意思決定支援」をテーマに講義した。ソーシャルワーカーの立ち位置、緩和医療の現場における意思決定の局面と支援、意思決定支援の局面に求められるもの等に触れ、意思決定のための環境整備を「情報」「パターンリズム」「時間」に整理して説明された。医療チームのソーシャルワーカーとしての意思決定支援は、「意向の明確化への支援」「本人自身の価値や人生の事情といった個別性の重視と担保への支援」「今、その人が生きるために必要な『環境としての医療』への介入」等であると述べ、様々な意思決定支援の局面を体験するソーシャルワーカーが、医療チームのメンバーとして意思決定支援にどう貢献するか、どのような姿勢で向き合うかといった講義を展開された。

■一日の研修のまとめとして、講義後に全体から感想や研修を通した気づきの声を拾い、

振り返りをおこなった。日々の臨床に照らしつつ、在院日数等の縛りによる支援期間の短縮化の中にあっても、当事者の意向・価値を尊重する意思決定支援に向けて、ソーシャルワーカーの積極的な介入の意味を確認しあい、終了となった。

今回の研修は受講生にとって、ソーシャルワークの一部である意思決定支援というテーマであったが、その重要性にとどまらず、更にソーシャルワークの価値、相談支援の本質、アセスメントの重要性など、多くのことを習得・再確認する機会となったと考える。こうした機会を、支援していただいた貴財団に、心より感謝申し上げます。